

新潟地方気象台の3か月予報に基づく農作物等の管理対策（第3報）

令和2年5月29日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台から令和2年5月25日に発表された「北陸地方3か月予報」によると、6月は、前半天気が数日周期で変わり、後半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は、高い確率50%です。7月は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は、平年並または高い確率ともに40%です。8月は、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。今後の気象変動に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

記

I 水稲

1 本田管理

- (1) ワキの発生が多いほ場では夜間落水を行い、根の健全化に努める。
- (2) 薬害防止のため、異常低温時または異常高温時には除草剤の使用を避ける。
- (3) 6月は気温は平年より高いと予想されていることから、分げつの発生が旺盛となり過剰生育となることが懸念されるため、田植え後25日を過ぎたら茎数を必ず確認し、遅れないよう中干しを開始する。特に、連休植えのほ場や生育が過剰になりやすいほ場では、速やかに茎数を確認する。
- (4) コシヒカリの中干しは、一般的な地力のほ場では茎数が目標穂数の7～8割を確保した時期、生育が過剰になりやすいほ場ではより早めの6～7割の時期に開始する。コシヒカリ以外の品種は、目標穂数の8割の茎数を確保した時期に中干しを開始する。
- (5) 中干しの程度は、田面に小さなヒビが入り、軽く足跡がつく程度まで行う。土壌が肥沃な地帯や生育量の大きなほ場では強めに、地力が低いほ場や生育量が小さいほ場では弱めとする。適正生育量の確保や幼穂形成期頃の徒長防止のためにも、中干しは適切な強さで実施する。
- (6) 中干し後の効率的な水管理やフェーン等の緊急時の迅速な灌水を可能とするため、溝切りは確実に実施する。
- (7) 中干し終了直後は浅水の間断かん水を行い、その後水尻止水し、徐々に飽水管理に移行して、うわ根の発生促進や根の健全化及び地耐力の維持に努める。
- (8) 強風及びフェーン現象による高温・乾燥が予想される場合には速やかに湛水し、稲体からの急激な蒸散による障害の発生防止に努める。ただし、長期間の湛水は避ける。

2 病虫害防除

- (1) 7月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されており、いもち病発生の好適条件が出現しやすくなることが懸念される。
- (2) 補植苗は葉いもちの伝染源となりやすいため、補植終了後は速やかに除去する。
- (3) いもち病多発生地域におけるコシヒカリBL、新潟次郎や業務用米等における多収穫栽培、新之助やわたぼうし等のいもち病に対する抵抗性が弱い品種を作付ける場合及び大豆跡等で生育過剰になることが予想されるほ場で、育苗箱施用剤や側条施用剤による葉いもち防除を実施していない場合は、本田で予防粒剤を適期に施用する。
- (4) 斑点米カメムシ類の増殖地をなくし密度を抑制するため、農道・畦畔等の草刈りは

5月下旬から雑草種子が結実しない間隔（およそ3週間）で行う。

また、カメムシ類の水田内への誘引源・増殖場所となるヒエ類やイヌホタルイ等の水田内における除草を徹底する。

II 大麦

- (1) 出穂期が早かったため、成熟期は概ね前年並みで、平年よりかなり早まると予想される。成熟期は、大部分の穂・穂首が黄変し、子実が「ろう」位の硬さ（水分35～40%で、爪で押すと割れる、またはつぶれる）になった頃である。刈遅れないように成熟期を見極め、適期の収穫（収穫開始は成熟期から2～3日後で、収穫適期幅は4～5日程度）に努める。
- (2) 農産物検査法の規格では、製品への赤かび粒、麦角粒の混入限度は0.0%と定められており、赤かび粒、麦角粒の混入を防ぐため、多発ほ場産の麦と正常麦とを区分して、収穫・乾燥、調製作業を実施する。

III 大豆

1 栽培管理

- (1) 中耕・培土は、ほ場条件の良い時を逃さず適期に2回実施する。1回目は、第2複葉展開期頃（は種後25日頃）に子葉節まで土を寄せ、2回目は第5複葉展開期頃（1回目の2週間後頃）に初生葉節まで土を寄せる。
- (2) 株元までしっかり土を寄せて、雑草を埋没させるとともに不定根の発生や倒伏防止など培土効果を十分発揮させる。また、収穫時に土砂をかき込まないように最終培土の高さは15cm程度に抑える。
- (3) 出芽が不揃いのほ場では、生育の早い大豆に時期を合わせて中耕・培土を行い、培土の高さは低めにする。
- (4) 雑草の発生が早いほ場では、1回目の中耕・培土を早めに行い、必要により中耕・培土の回数を増やす。
- (5) 中耕・培土が計画どおり実施できず、雑草害が懸念される場合は、「農作物病害虫雑草防除指針」を参考にして、生育期処理除草剤を適正に使用する。
- (6) 登録のある非選択性除草剤を畦間処理する場合は、大豆にかからないよう飛散防止ノズル、飛散防止カバーを用いて散布する。
- (7) 湿害による葉の黄化や生育不良の症状が見られたら、排水を促した後、速効性肥料を窒素成分で10a当たり1～3kg追肥し、培土を行う。

2 排水対策

- (1) 中耕・培土後は畦間に停滞水が生じないように、畦間の溝を周囲明きよにつなげる。
- (2) 大雨の前後は、ほ場内排水溝及び排水口の点検・補修を行い、地表水の迅速な排除を促す。
- (3) 梅雨明けまでは、湿害を防止するため、暗きよ栓を開放しておく。

IV 野菜

1 施設野菜

- (1) きゅうり、トマト等のハウス栽培では、草勢を維持するため、かん水や追肥を適切に行い、高温障害が発生しないよう遮光や換気等により適切な温度管理に努める。併せて、灰色かび病等の病害が発生しないよう換気による湿度管理や、り病葉及びり病果の除去など、耕種的防除を徹底する。
- (2) いちごは、高温期となり成熟が進みやすいことから、果実の日持ち向上とオセ・スレの発生を防止するため、過熟に注意した適期収穫を行うとともに収穫後の丁寧な取り扱いや予冷等を徹底する。

2 露地野菜

- (1) 降雨時に停滞水が生じないように、排水路の確認など排水対策を徹底する。また、畝間かん水を行う場合は、翌朝には畝間に停滞水が無いように注意する。
- (2) アスパラガスは、乾燥が続くと萌芽数が減少するので、チューブかん水やうね間かん水を行う。また、前年病害により早期に枯れ上がりしたほ場では、過収穫に注意し天候が安定している時に立茎を開始するとともに、防除に努める。
- (3) 砂丘地のすいか・メロンのトンネル作型では、着果後乾燥が続く場合、チューブかん水だけでは不十分なため、スプリンクラーによるかん水を併用する。密閉作型では降雨前後を中心に防除を徹底する。
- (4) えだまめは、フタスジヒメハムシやべと病が増加する時期となるため、防除を徹底する。
- (5) ねぎは、生育適温に入っているため肥料切れや土壌の乾燥に注意し、生育停滞を防ぐ。また、本格的な降雨に備えて溝切りなどを行っておく。さらにべと病及び葉枯病の発生が見られる時期となるため、防除を徹底する。
- (6) 秋植えたまねぎは、茎葉が全倒伏しておおむね1週間後、春植えたまねぎは、茎葉が8割以上倒伏した晴天時に収穫する。

V 果樹

1 栽培管理

- (1) かきやぶどうの開花はほぼ平年並の見通しであるが、気象状況や生育状況に応じて、かきの摘らい摘果やぶどうの房切りなどが作業遅れとならないよう注意する。
- (2) 無加温栽培や育苗ハウスを利用したぶどう・いちじく等は日中の高温による生育障害に留意し、ツマの解放等必要に応じて対策を講ずる。特に梅雨明け以降は急激に気温が上昇するので葉焼け・縮果病等に注意する。

2 気象災害対策

- (1) 降雨による河川の増水により水害を受けやすい時期でもあるので、地表面の排水状況を確認し、不十分な場合には対策を講ずる。
- (2) フェーン現象で長時間高温状態が継続する場合には、露地栽培であっても水分ストレスによる生育停滞や生理障害果の発生が助長されるので、ほ場条件に応じて敷きわらやマルチ等の乾燥防止対策を行うとともにスプリンクラー等かん水設備の点検をして備える。
- (3) 台風やダウンバーストなど、通常とは異なる風向きや強風にも備え、防風網・防風林等の点検整備にも配慮する。

3 病虫害防除

- (1) 各樹種とも病虫害の重点防除期なので、発生予察情報等を参考に適期防除に努め、降雨が続く場合でも極力散布間隔を空けないように留意する。
また、なしでは胴枯病（芯ぐされ）や輪紋病、セイヨウナシ褐色斑点病などの感染拡大を招くことのないよう、特に注意して対策をとる。
- (2) 開花中のかき・キウイフルーツ、これから開花期を迎えるぶどうやくり、継続して着果するいちじくなどは、生育ステージを把握しながら、アザミウマ類やカイガラムシ類等の発生初期からの防除等により、密度の低下を図る。

VI 花き

1 球根養成

- (1) チューリップ、スイセン、ユリ等の球根養成では、降雨等で過湿とならないよう排水を徹底する。一方、乾燥が続く場合には適宜かん水を行い、収穫まで土壌水分を適正に維持する。特に、砂丘畑等乾燥しやすいほ場で、高温・乾燥が続く場合はスプリンクラーで定期的にかん水を行う。

- (2) 収穫期に入るチューリップ球根は、収穫が遅れると裂皮や球根腐敗の原因となるので、葉の枯れ込みと球根外皮の着色等を確認し、適期収穫に努める。

2 施設切り花、鉢物

- (1) ユリ、トルコギキョウ等の切り花類や鉢物類では、日照不足が続いた後の天候回復時に葉焼け（チップバーン）等の生理障害が発生しやすいので、遮光や換気等により適切な温度・湿度管理に努める。また、晴天時には土壤水分に注意し、適宜かん水する。
- (2) 曇天が続く場合は、日照不足による軟弱徒長に注意し、日射量に応じたこまめな遮光資材の掛け外しを行う。

3 露地切り花

- (1) ユリ、宿根草類等の露地ほ場では、降雨等で過湿とならないよう排水対策を徹底するとともに、高温・乾燥が続く場合には適宜かん水を行う。
- (2) 定植後の活着を促進するため、耕うんを丁寧に行うとともに、土壤水分を適切な状態にして定植する。
- (3) ユリ切り花で強光・高温下での定植となる場合は、球根コンテナに覆いをかけるなどして球根の高温・乾燥状態を避けるとともに、遮光等により定植後の高温障害の発生を防止する。

4 病虫害防除

- (1) 気温の上昇に伴い、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類などの害虫の多発生が懸念されるので、発生状況を早期に把握し、迅速に防除を行う。
- (2) 施設栽培では、換気による湿度管理やり病葉の除去を行うとともに、発生状況を早期に把握し、迅速に防除を行う。
- (3) 高温時の農薬散布は薬害のおそれがあるので、朝・夕の涼しい時間帯に散布する。

Ⅶ 畜産

1 家畜の管理

- (1) 天気予報に注意し、急な気温上昇に伴う熱射病等の家畜疾病を防ぐため、換気扇や扇風機による畜体等への送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。
- (2) 給餌による急激な体温の上昇を防ぐため、多回数給与や朝・晩の涼しい時期に給与し、また、新鮮な飲水が確保されるように努める。
- (3) 熱射病等により家畜に急激な体調の変化が見られる場合は、速やかに獣医師の診療を受ける。
- (4) 高温・多湿の条件下では臭気苦情が発生しやすいことから、家畜ふん尿の速やかな排出と適切なたい肥化を行うなど、臭気の低減に努める。

2 飼料作物の管理

- (1) 牧草は刈遅れないように収穫し、2番草の生育確保のため速やかに追肥を行う。
- (2) 牧草のサイレージ調製は良好な発酵を促すため予乾を行い、水分50～65%となるよう努める。
- (3) 飼料用トウモロコシは収量の確保のため6月上旬までの播種に努め、排水不良のほ場においては湿害防止対策として周囲に明きよを施す。

除草はは種時の覆土・鎮圧完了後に土壤処理剤を全面散布し、トウモロコシ展葉後は必要に応じて茎葉処理剤を散布する。